

令和元年6月11日現在

機関番号：15101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K02113

研究課題名(和文) チェコ・ナショナリズムの音楽表象と民族的アイデンティティ獲得の為の闘争

研究課題名(英文) Czech Music of Nationalism and Conflict for the Achievement of National Identity

研究代表者

内藤 久子 (NAITO, Hisasko)

鳥取大学・地域学部・教授

研究者番号：60263456

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、19世紀から20世紀初頭における「チェコ芸術音楽」の表象を「文化ナショナリズム」の視座から論究するものである。まず第一に、ボヘミア楽派のB.スメタナやA.ドヴォルジャークから、モラヴィアのL.ヤナーチェクに至る「民族主義オペラ」の様式上の変遷を跡づけて「美と民族性」の論理を解明し、第二に「チェコ民族主義の音楽」を「英雄的なるものと素朴なるもの」(J.Samson)の視座から捉え、特にスメタナの歌劇や連作交響詩の分析を通して、「チェコ性」の本質的要件や「チェコ国民オペラ」の理念について洞察した。第三に「チェコ音楽と政治」の関わりを英語論文として纏め、海外のチェコ研究者に発信した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

「チェコ近代音楽」の創造をめざすプロセスの中で、19世紀の音楽家はいかなる考えや思想に基づいて創作活動を行い、それぞれの立場で苦闘を重ねながら、政治家たちとも激しい論争を交えつつ、自らの信念に従っていかにより珠玉の芸術作品を創造していったのか、特に芸術と社会の密接な関わりの中で、中欧の小国チェコがどのように民族的アイデンティティの獲得を成し遂げていったのか、その過程を時の政治家たちによる関与や美学者の思想等とも関連づけて読み解くとともに、「チェコ性」の条件を追求するという本研究の主旨は、小国の音楽文化史を繙く上で、また中欧の文化史研究において極めて特色のある重要な視点であると考えられる。

研究成果の概要(英文)：This paper aims to consider the representation of Czech music from the 19th century to early 20th century, in particular from the viewpoint of 'cultural nationalism'. First of all, tracing the stylistic transitions of Czech national opera from the Bohemian School, such as B.Smetana, the father of the Czech National School and A.Dvorak, to L.Janacek of Moravia, I interpreted the aesthetic theory of 'the beauty and national characteristics' of O.Hostinsky in detail. Secondly, I clarified the Czech national music as aspects of 'what is heroic and what is naive (rural)' (by J.Samson), especially analyzing a cycle of symphonic poems of B.Smetana and his operatic works. Thus I conducted an investigation into some essential conditions of 'Czechness' in music or the idea of Czech national opera. Thirdly, my English article on "Czech Music and Politics" could meet with approval of the foreign research workers of Czech music.

研究分野：人文学(音楽学)

キーワード：チェコ・ナショナリズムの音楽表象 チェコ国民オペラ B.スメタナ A.ドヴォルジャーク L.ヤナーチェク 民族的アイデンティティ ボヘミア楽派 モラヴィア・フォークロア主義

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 「文化ナショナリズム」の運動が政治ナショナリズムに先行したとされるハプスブルク帝国チェコ諸領邦では、音楽作品そのものが時代のメッセージを発するものとして機能し、それゆえ、政治ナショナリズムへと移行する上で重要な鍵となり得たと考えられる。本研究に着手するにあたり、筆者は、『チェコ音楽の歴史 民族の音の表徴』(音楽之友社、2002年)[2002年度科学研究費補助金・研究成果公開促進費・学術図書出版の助成を受ける]を基盤的成果としつつ、『チェコ音楽の魅力 スメタナ・ドヴォルジャーク・ヤナーチェク』(東洋書店、2007年)といった更なる「チェコ音楽史」の自著を通して、主に近現代のチェコ社会における「ナショナリズムの音楽表象」に注視しながら、チェコ人作曲家の生涯や音楽作品の分析研究に加え、チェコ音楽と社会の相関的諸課題を歴史的に探究する等、チェコ音楽研究の成果を積み上げてきた。

(2) こうしたチェコ研究の進捗状況を踏まえた上で、2010年、筆者が『グローバル COE プログラム コンフリクトの人文科学』(大阪大学大学院人間科学研究科)の分科会「芸術・文化におけるコンフリクト研究」(同文学研究科)で行なった招待講演「チェコ音楽とナショナリズム 民族的コンフリクトの時代」を契機として、「チェコ・ナショナリズムの音楽表象」をめぐる研究課題をさらに進展させる為、19世紀後半から20世紀前半に至る、まさに第一次世界大戦期を挟んだ一連の「民族性」をめぐる「コンフリクト(闘争)時代」に焦点をあてることで、同時代の「チェコ音楽」が理想とする「国民音楽」の諸相を、新たに「近代音楽」の創造に向けた様々な苦闘や心理的葛藤のありようととも詳細に検証したいと考えようになった。即ち、同時代における「音楽のナショナリズム現象」という複合的な創造の過程を解明し、20世紀初頭におけるチェコ近代国家の成立に向けた重要な歴史の転換期に、チェコ人が音芸術の表象を通して、いかに独自の「民族的アイデンティティ」、つまり「チェコ性」を獲得すべく苦闘を重ねていったのか、その道程を探求する必要性を強く認識するようになったといえる。

## 2. 研究の目的

(1) 本研究の主旨は、主に19世紀から20世紀初頭という世紀の転換期における「チェコ芸術音楽」の動向を、「民族性の獲得」という「ナショナリズム(民族主義)」の視座から読み解くことである。即ち、近代国家成立の道程を通して、チェコ人作曲家や批評家、政治家たちがどのような「アイデンティティ獲得」の為の「コンフリクト」を展開していったのか、そして「近代チェコ」の理念に最も相応しい音芸術の創造をどのように決定づけていったのかを詳細に跡づけることにある。そして、「チェコ近代音楽」の成立に向けた様々な動向を通して、芸術表現に組み込まれたメッセージやメタファーを解読し、当時、悲願となっていた「チェコ国民オペラ」を成立させ得る条件とは何か、またそこに希求される「チェコ性」の本質的な意味とは何かを追求しつつ、具体的にはB.スメタナの劇作品や連作交響詩の他、A.ドヴォルジャークやL.ヤナーチェクの劇作品をも射程に入れて分析や検証を試みることにより、「チェコ・ナショナリズムの音楽表象」の全貌をより多面的に解明することを第一の目標と考えた。

(2) 加えて、19~20世紀に生じた民族的闘争の時代における「チェコ・ナショナリズムの音楽」を、「コンフリクト」をキーワードとして読み解く為、まず「民族文化の象徴化と音楽のナショナリズム現象、その美学的論理」について「ナショナリズムの音楽的美学的系譜」やチェコの美学者オタカル・ホスティンスキー(1847~1910)の美学思想を解明した上で、次に作曲家たちの書簡やチェコ語文献を駆使しながら、「独立に向けた『ナショナリティ』をめぐる闘争」へと進み、さらに「新生国家の誕生と国民的音楽表象の確立 『ボヘミア楽派』の意義」や「音芸術の果たす役割」について、段階的に音楽作品の様式分析とその作品を基礎づける思想や思考の体系を交差させながら、例えば、当時、生じた様々な葛藤を象徴する「チェコ人の為の文化機関をめぐるドイツ人とチェコ人の対立」や「チェコ社会での進歩派と保守派の対立」、そして「19世紀ウィーンの音楽界にみるチェコ音楽受容」や「20世紀のチェコ音楽界におけるスメタナ、ドヴォルジャーク受容」等も含め、音楽と社会の関係性を統合的に検証していくことも、本研究の主なねらいの一つといえる。

## 3. 研究の方法

(1) 本研究を進めるに当たり、まず19世紀後半から20世紀に至る近現代のチェコ芸術音楽の系譜を跡づけることを目して、「民族文化の生成とアイデンティティの構築」をめぐる、作曲家B.スメタナ自身による「コンフリクト」のプロセスにまず注目し、具体的には、(スメタナを擁護した)プラハ大学の著名な美学者O.ホスティンスキーが著した『チェコ近代音楽をめぐるスメタナの苦闘』(初版1901;チェコ語文献)や、『スメタナ書簡集』(1896;チェコ語文献)を読み解く一方で、汎スラヴ主義的な表現に彩られたA.ドヴォルジャークと、ウィーンの批評家E.ハンスリクや作曲家J.ブラームスとの間で交わされた貴重な書簡を読み進めていった。こうして、従来、チェコ社会の動向のみに限定していた研究の射程を、ハプスブルク帝国内の現象へと敷衍して考察することで、そうした芸術思潮のダイナミズムをより立体的かつ構造的に理解し、「チェコ近代音楽」の創造に向けて生じた種々の困難で複雑な「コンフリクト」の諸相をチェコ語文献や独語文献をもとに明らかにし、さらにウィーンやプラハといった都市社会の動向も含め、より包括的な検証を試みた。

(2) このように「チェコ近代音楽」を標榜する動きや、「民族的アイデンティティの獲得」を

強く希求する中で、「コンフリクト」を引き起こす重大な契機ともなった第一次世界大戦期に焦点を当て、「チェコ・ナショナリズムの音楽表象」に、同大戦が及ぼした影響やその意味についても考察を深めていった。そして1918年、第一次世界大戦の終結とともに「チェコスロヴァキア国家の独立」という悲願が達せられる中で、同時代のチェコ人たちはそれぞれの立場（芸術家、批評家、学者、政治家他）から、19世紀後半に「チェコ的で近代的」な音楽表象の確立を目指した「チェコ国民楽派」のスメタナや、同時期にスラヴ主義的表現を追求していったドヴォルジャークら、2人の音楽受容を基軸としながら、新生国家における一民族の文化的固有性をどのように理論化し確定しようとしたのか、つまり19世紀「国民楽派」の音楽表象（とりわけ劇音楽を通じた言葉と音楽の関係性）に、20世紀のチェコ人たちは何を希求したのか、彼らのアイデンティティの本源を、主にチェコ語文献をもとに詳細に読み解いていった。

(3) とりわけ英国の音楽学者 J. サムソンが提唱した、一般に「民族主義の音楽」を特色づける「英雄的なるものと素朴なるものの表象」という二つの側面から、チェコ音楽の特質を捉えることにより、当時の人々が標榜した「民族性」の意味、つまり「チェコ性」に関する解釈の多様性に注視しながら、「国民オペラ」の存立の為の要件について、ドイツの音楽学者 C. ダールハウスの言説を参照しつつ、「虚構」や「仮説」としての本質的意味について改めて考察する必要があると考えた。同時に「チェコ性」を決定づける要素として、例えば、言葉と音の関係性を意味する「チェコ語デクラマツィオン」の諸要素について楽曲分析を通して検証し、「チェコ民族主義の音楽」の実体を洞察した。その為、チェコ音楽文化史や西洋文化史関係図書、さらに貴重な楽譜や音源等を、楽譜・文献の海外輸入を専門に手がける「アカデミア・ミュージック社」（東京）を介して迅速に入手するに至った。

(4) また「アイデンティティそのものへの揺さぶり」や「価値観の多様性」が見え隠れする中で、「民族的アイデンティティの獲得」を具体的にどのような基準で、どのような理念のもとに達成しようとしたのか、つまり「チェコ・ナショナリズムの音現象」を20世紀初頭の歴史的諸相から見直すにあたり、ヨーロッパ史やチェコ史に関する資料や文献を参照しながら、従来の「音楽学」の枠を超えて、「スラヴ学」や「文化ナショナリズム研究」といった視座からも洞察していった。また最新の英語、独語、チェコ語文献を駆使しつつ、そこに近代国家の成立という歴史的事象を重ね合わせることで、より包括的に「チェコ・ナショナリズムの音楽表象」を解明する方法を選択したといえる。

#### 4. 研究成果

(1) まず中東欧史関連の文献をもとに、「チェコ・ナショナリズム現象」の特質にみる文化ナショナリズム先行の様態について明らかにしながら、チェコ人のナショナリズムにとって決定的要因となった民族間の対立（つまりチェコ人とドイツ人間の対立）という政治的・社会的背景を踏まえた上で、19世紀前半頃までの「スラヴ文化の再生」を意味する「民族再生運動」について理解を深め、当時のチェコ諸領邦において歴史的・文化的記憶の覚醒がどのように行われていったのかについて、石川達夫著『民族再生運動』（岩波書店、2010）を参考に、また新たに海外から入手したスメタナ・オペラに関する研究資料や文献を駆使して、「チェコ性」の問題の解明をより幅広く進めることができたといえる。

さらに「ナショナリズムの美的表象」を普遍的に捉える為、まず「19世紀『ナショナリズムの音楽』の美学」と題した論考を『地域学論集』（2015年、主な雑誌論文を参照）にまとめ、その前提となる「地方性への回帰と歴史的合意」について明らかにする一方、「音楽表象にみる美学的論理」に関する研究も同時進行させていった。特にスメタナの思想の礎石を築いた O. ホスティンスキーの美学論理を解明する為、「オタカル・ホスティンスキーの美学思想『美』と『民族性』の論理」（2017年、主な雑誌論文を参照）と題して論述し、こうして（チェコ語による）難解なホスティンスキーの美学をスメタナの思想との関係から丁寧に論説した。

(2) 「チェコ・ナショナリズムの音楽」の具体的な研究事例として、チェコ・オペラ作品の研究に着手し、まずその様式の変遷史を跡づけるとともに、19世紀の国民オペラを特徴づける「地方色（ローカル・カラー）」の問題を考察するに至った。その成果として、まず19世紀から20世紀初頭のチェコにおける「民族主義オペラ」の系譜とその様式上の変遷という視座のもと、ボヘミア楽派のスメタナやドヴォルジャークから、モラヴィア地方のヤナーチェクによる「モラヴィア・オペラ」に至る近現代のチェコ・オペラ史について論じることで、劇作品における「チェコ性」の様式表現の多様性について検証できたといえる（2016年、雑誌論文参照）。また19世紀「ナショナリズムの音楽表象」を「素朴なるものと英雄的なるもの」（英国の音楽学者 J. サムソンの言説）として捉え、まず前者の「素朴なるものの表象」に関する研究に着手し、即ち、フォークロア主義や田園の生活・情景を象徴化した「地方色」の問題として作品を分析・考察した。中でもチェコ国民楽派の始祖 B. スメタナ（1824～84）の喜歌劇を対象に、「19世紀『国民オペラ』の表象 B. スメタナの喜歌劇と地方色（ローカル・カラー）の描写」（2016年、雑誌論文を参照）と題してその成果をまとめ、「チェコ国民オペラ」の成立と「地方色」の問題を、単に固有性としてではなく、19世紀という時代を貫徹する普遍的条件として解することで、「ナショナリズムの音楽」の解釈の問題についても論究した。即ち、スメタナは民謡の引用に依拠せず、チェコ近代オペラの理想を実現しようと、具象的な「現実主義的な田園生活」という象徴コードに基づく「ナショナルなもの」への変換を通して、ボヘミアの「地方色」の多彩な表現法を駆使しながら、いかにして「チェコ性」を確立し、新時代における国民劇の創造を成し遂げていっ

たのかを詳細に跡づけることができたといえる。

(3) 続いて、チェコ近代音楽における「英雄的なるものの表象」に焦点をあてて本研究に取り組み、主にチェコ古代の神話やカレル四世の歴史、何よりも中世期の「フス教徒運動」といった文化的・歴史的記憶に基づく音楽表象に注視し、特にスメタナの連作交響詩《わが祖国》(地誌的標題に基づく6曲の交響詩からなる)を例に、「チェコ民族」の音芸術とそこに描かれた聖地にまつわる歴史的イメージがどのように結び付いて「ナショナルな表現」へと昇華されて行ったのかを論述した(2018年、雑誌論文を参照)。とりわけ神聖なヴィシェフラット(高い城)の地を舞台とする、チェコ建国の女神を描いた「リブシェ神話」や、ボヘミア地方南部のターボルを拠点に、チェコ人の精神的支柱を担ったとされる「フス教徒運動」の音楽化を通して(特に第1曲と第5曲)チェコ民族の音芸術と二つの聖地が、「民族主義」を軸にどのように結び付いたのかを明らかにした。これにより、スメタナの民族主義思想の深層を読み解くとともに、チェコ人にとって「ナショナルなもの」の原点とは何か、さらに空想と現実が交錯する中で、民族にとって「神聖なる土地」が意味するものとは何かを洞察することにより、スメタナの代表作《わが祖国》の作品研究を、神話や伝説、歴史の視座から幅広く再考し、いわば「英雄的なるものの表象」としての「チェコ民族主義の音楽」の諸相を、より深層的に、また文学や歴史といった複合的な視座から論究することで、学会においても「きわめて精緻な研究」と評された(学会発表を参照)。

(4) またチェコ国民楽派の一人 A.ドヴォルジャーク研究においても、ドヴォルジャーク再考という視点から、「チェコ性」の獲得について著作の改訂を行ない、第5版を刊行するに至った(2016年、図書を参照)。即ち、スメタナのみならず、ドヴォルジャークの音楽表象を通して、いわば「チェコ性」としての「民族的アイデンティティ」をどのように作品に投影し表出させることで「民族主義」の表象を実現していったのか、またその思想の真意を追究することを通して、多彩な「民族主義」をめぐる解釈とその複雑な思想の絡み合いに対し、文化・社会・政治的背景を照射させながら読み解いた。本作品シリーズは、詳細な作品資料を伴い、最新の研究成果を盛り込むかたちで、新しい作曲家像を描き出した書き下ろしであり、生涯篇・作品篇・資料篇からなるものとして、いわゆる作曲家シリーズの決定版と評されている。加えて2020年に刊行予定の『東欧文化事典』(図書を参照)において、第4章 音楽：クラシック「A.ドヴォルジャーク」の項目を、「スラヴ時代への道程」「作曲家としての名声と栄光」「不当な評価と擁護論」という観点から書き下ろした。

(5) 何よりもスメタナの「国民オペラ」をめぐる研究の集大成として、「2017年度日本スラヴ学研究会」(2018年3月39日)での招待講演における発表原稿をもとに、約3万字超の学会誌論文(招待論文)をまとめ、スメタナ・オペラの傑作《売られた花嫁》を対象に、『「チェコ性」のイメージの構築』について、特に言葉と音の関係性である「チェコ語デクラマツィオン」の問題を中心に論じながら、さらに仮説や虚構としての「国民オペラ」の本質的課題に触れることで、「民族主義の音楽」や「国民オペラ」の理念の問題を論じるに至った。本研究を通して、音楽とチェコ語表現の問題も含め、本課題研究を総括する立場から、19世紀後半における「国民オペラ」の理念を精鋭に紐解くとともに、スメタナが、「祝祭劇」という一つの「仮説」としての「チェコ国民オペラ」のありようを提示した点を強調するとともに、当時、彼自身が希求した「チェコ国民オペラ」の本質的条件を解明することができたといえる(2019年、雑誌論文を参照)。こうして音楽表象にみる「チェコ性」の問題を多面的に追究し、民族的アイデンティティ獲得に向けたスメタナの創作過程を詳細に洞察することにより、「スラヴ学」の成果としても、本課題を集大成することができたと考えられる。

(6) 「チェコ民族主義」の複合的な変遷の過程を明らかにすべく、「チェコ音楽と政治」と題する英語論文を通して、チェコ音楽をチェコ近代国家の成立をめぐる動向と関係づけながら、特に「チェコ芸術音楽の役割」について洞察し、「チェコ・ナショナリズムの音楽表象」の重層性について纏めることができた(2018年、雑誌論文を参照)。即ち、19世紀後半から20世紀初頭における「民族的アイデンティティ獲得に向けた闘争」を焦点に、「音楽のナショナリズム現象」を多面的に考察したといえる。入手したチェコ音楽文化史の諸文献や楽譜類、チェコ音楽に関するチェコ語論文(第一次資料を含む)等の収集を経て、具体的には、そうしたボヘミア社会の変容を背景に、新興ブルジョアジーたちが知的・芸術的エネルギーをナショナリズム運動に注いでいくプロセスを、何よりも都市プラハにおける劇場や公共の文化施設、芸術家団体の設立等、文化機関をめぐる「ドイツ人支配に対するチェコ人の抵抗」に焦点をあてて詳細に調査し、「チェコ国民劇場」の創設(1881)とそれがもたらす意味について、つまり音楽文化の発展にみる公共的文化機関の機能についてもさらに知見を深めることができた。

また「民族復興」の政治的思想を象徴化する「フス派のコラール(聖歌)」をめぐるスメタナの音楽表現の差異と共通性、ならびに民族的闘争の中での「芸術家の使命や役割」に対する自覚のありよう等、近代芸術の推進に対し、フォークロアなどの民衆文化に依拠する保守的な創作の方向を対峙させながら、実際に生じた「芸術と国家形成をめぐる論争」を検証し、その焦点がどこにあったのかを詳細に分析した。

(7) 最後に、近現代のチェコ・ナショナリズムの音楽研究の成果は、現在構想中である、当時「ヨーロッパの中のチェコ」という政治的指針に合致した「チェコ近代音楽をめぐるスメタナの苦闘」のプロセスを、今後、単著としてまとめ刊行する上で、その最も核心となるであろう「チェコ音楽表象のナショナリズム」を構成する重要部分と考えており、小国チェコの地で花開いた

音芸術をめくり複雑に展開していった「コンフリクト」の視点からの様々な諸相と、そのような社会の大転換期を考察の中心的背景に据えることにより、珠玉の芸術創造の世界をこれまで以上に立体的に明示するという試みを通して、また「チェコ・ナショナリズムの音楽」の多様性を強調することにより、単なるチェコ音楽研究の領域を凌駕して、中央ヨーロッパ小国の文化史研究にも十分寄与するものであると考えている。

## 5. 主な発表論文等

### 〔雑誌論文〕(計8件)

内藤 久子、チェコ国民オペラの創造とその理念 B.スメタナの喜歌劇《売られた花嫁》にみる「チェコ性」のイメージの構築、スラヴ学論集 *Slavia Iaponica* (日本スラヴ学研究会誌) 査読有(招待論文) 22号、2019、[シンポジウムI] 1-31

内藤 久子、チェコ民族主義の音楽と聖地 「リブシェ神話」と「フス教徒運動」の視座から、民族芸術(民族芸術学会誌) 査読有、第34巻、2018、77-83

内藤 久子、“Czech Music and Politics from the Late 19<sup>th</sup> Century to Early 20<sup>th</sup> Century: Formation of a Modern Nation and the Role of Art Music”, 地域学論集、査読無、第14巻第3号、2018、191-208

内藤 久子、オタカル・ホステインスキーの美学思想 「美」と「民族性」の論理、地域学論集、査読無、第13巻第3号、2017、83-97

内藤 久子、19世紀「国民オペラ」の表象 B.スメタナの喜歌劇と地方色(ローカル・カラー)の描写、民族芸術(民族芸術学会誌) 査読有、第32巻、2016、178-186

内藤 久子、中欧のチェコにおける「民族主義オペラ」の変遷 「ボヘミア楽派」から「モラヴィア・フォークロア主義」へ、オペラパレス(新国立劇場編) 査読有、2016、31-34

内藤 久子、19世紀「ナショナリズムの音楽」の美学、地域学論集、査読無、第12巻第1号、2015、113-135

### 〔学会発表〕(計3件)

内藤 久子、チェコ国民オペラの創造 B.スメタナの喜歌劇《売られた花嫁》にみる「チェコ性」のイメージ、日本スラヴ学研究会大会(招待講演;東京大学) 2018

内藤 久子、チェコ民族主義の音楽と聖地 「リブシェ神話」と「フス教徒運動」の視座から、民族芸術学会大会(第33回;鳴門教育大学) 2017

内藤 久子、19世紀「国民オペラ」の表象 B.スメタナの喜歌劇と地方色(ローカル・カラー)の描写、民族芸術学会大会(第31回;新潟日報メディアシップ) 2015

### 〔図書〕(計2件)

羽場 久美子(編集代表)、内藤久子 他、丸善出版、東欧文化事典(第4章 音楽:クラシック4-4 「アントニン・ドヴォルジャーク」分担執筆) 2020、印刷中、700頁(査読有:招待著書、分担頁未定)

内藤 久子、音楽之友社、作曲家 人と作品シリーズ ドヴォルジャーク(第5版) 2016、270頁(査読有:招待著書)

## 6. 研究組織

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

